

ル作戦開始後より空爆はますます激しくなり、夜間、空爆を避けて患者が続々と後送され、昭和20年撤退直前には3,000名の患者を収容した。【メイミョウ】北ビルマシヤン高原にある風光明媚な避暑地。当初は平穏な日々が続いたが、インパール作戦開始後より前線から多くの傷病兵が送られた。【タウンジー・カロー】山間僻地にある大規模な欧風都市。昭和18年8月前線からの後送患者は常時1,500~2,000名、昭和20年3月には3,000名であり、患者が周辺の沢や森かげに溢れた。【マイクテラ】昭和20年2月27日第107兵站病院が敵の戦車による突入を受けた。病院長以下、多数の戦死者を出して壊滅した。【モールメン】隣国タイへの撤退ルートにあたり、撤退時は病院の廊下も外も、足の踏み場もないほどに患者が溢れた。手術室では毎日ガス壊疽患者の手足の切断が夜遅くまで続き、救護班も「さながら地獄絵図」「出征以来、これほど悲惨な勤務は始めて」と記録した。

5. 医療と救護班の状況

患者は栄養失調、外傷の他、マラリア、デング熱、アメーバ赤痢、コレラ、チフス、ペスト、ハンセン氏病等であった。看護は手術の介助、注射や繃帯交換などの処置の他、排泄物の処理と消毒、虱や南京虫の駆除のための衣類の煮沸、栄養、身体の清潔などを行った。インパール作戦失敗以降、夜間、患者が続々と後送され、病院に収容しきれず森や繁みにあふれ、翌朝、建物の床下や庭で亡くなることもあり、医療材料は極端に少なかった。末期では空爆を避けるため夜明けとともに患者を防空壕に入れ、弁当と水筒を置いて、夕方病院に患者を戻して夕食を与える日々が続いた。患者、看護婦、一部の兵站病院は昭和20年2月から撤退を開始し、日赤は優先的に逃がされるなどの保護を受けたが、第490救護班(和歌山)のように23名中15名の死者行方不明者を出した班もあった。

(平成24年12月例会)

江戸時代の労瘵(結核)~病にみるジェンダー

鈴木 則子

本報告は、江戸時代に「労瘵」・「労咳」・「虚勞」などと呼ばれた結核という病が、感染症でありながら、女性特有の生得的心身のありかたにも起因すると広く認識されていたことを、医学書を史料に検証するものである。

これまで先行研究は、主として随筆や浮世草子といった文学史料に依拠しながら、①元禄期、すでに労瘵は伝染する病であるという認識があり、②また治療薬もないために症状が激化することも珍しくなく、重要な死亡原因のひとつであったこと、③にもかかわらず、人びとはこの病を思春期の、しかも比較的上流社会の子女に多いとか、遊郭と結びつけて「艶っぽい病氣」「恋の病」とみなし、「もっぱら綺麗事」として扱ったということを指摘する。

病の深刻な実態とかけ離れたこのような労瘵観は、当時の医学の女性観とも深く関わっていた。

江戸時代前期の医学の基礎となっている明・清の中国医書をみると、労瘵の病因として自発と伝染の二通りをあげ、自発の場合は心身の「虚」の状態がこうじて、やがて労瘵となるとしている。

「虚」の原因は男女で異なる。ことに16世紀以降の中国医書は、男性は酒色におぼれ、贅沢で怠惰な生活を行うことに加えて、科挙のための勉強のしすぎなど自分の力量を越えて過剰に努力することが、女性は生まれつき精神が不安定で喜怒哀楽が激しく、また性欲が強いため欲求不満となることが、主たる原因と考えた。

これに対して元禄期以降の日本医学は、中国医学を基礎としつつも、日本社会のあり方を反映し

た新たな労瘵患者像を付け加えていく。安定した社会経済と豊かな都市生活の展開は、社会階層の固定化と消費生活の拡大をもたらし、ストレス社会を出現させた。日本近世史研究は、元禄期の京都洛中の自殺率が、現代日本のそれに匹敵することを明らかにしている。そのような社会状況のもと、労瘵は気の消耗＝「気虚」によってもたらされるだけでなく、ストレスによる気の滞り＝「気鬱」がもたらす時代病としても注目されるようになる。「気鬱」は、早期の治療を怠って重症化させると労瘵に進む、と考えられた。

元禄期の医学書は、「気鬱」の直接的原因として、男性の場合は武士や町人の職場における人間関係や経済活動を、女性の場合は、庶民に至るまでの「家」の成立を背景に舅・姑・夫に気に入られない嫁の精神的抑圧や、家庭内に閉じ込められた未婚女性・寡婦の性的欲求不満を強調する。中国医学では「気虚」に結びつけられたことがら、日本では「気鬱」と結びつけられるようになったのである。治療は気の鬱滞を取り除くことであり

(「順気」)、薬や鍼灸のほか、性的欲求不満解消のために早期の婚姻も有効とされた。

このような状況の中で、浮世草子に「気鬱」「気病み」という言葉が頻出するようになる。元禄期に医学的知が一般大衆へ広がることは先行研究が指摘するところだが、人びとは医学的概念である「気鬱」を日常生活の中で意識するだけでなく、現実に“労瘵症候群”とでも呼ぶべき労瘵様の症状を日常的に訴え始める。

ことに女性は男性よりも精神的に未熟であるため、「気鬱」の症になりやすいとみなされた。若い女性が、街角や寺社でふと見かけた美男への恋慕の情に身を焦がし、病の床に臥す、場合によっては死に至る、という浮世草子などにおけるありふれたモチーフ、すなわち「恋の病」としての労瘵がこうして成立する。その背景には、女性に対する当時の医学の身体観・病気観の広がりとしてを指摘することができよう。

(平成24年12月例会)

書籍紹介

C.J.S. トンプソン 著 (川満富裕 訳) 『手術器械の歴史』

原著は Thomson C. The History and Evolution of Surgical Instruments. New York: Schuman; 1942で、1999年に複製版が出版されている。ウェルカム医学図書館の代理人として医学関係の書籍と器械を収集したトンプソンによる手術器械の古典的通史の翻訳。100点以上の図版を使用し、外科・医学の発展と絡めながら手術器械の簡潔に変遷が述べられる。本文は器具ごとに章を分けて古代ギリシアから現代まで扱っている。訳者あとがきではトンプソンの紹介や日本における手術器械の歴史についても簡単に触れている。

目次

序章	1
第1章 メス	4
第2章 切断ナイフ	12
第3章 ノコギリ	24
第4章 穿頭器	35
第5章 膣の拡張器と検鏡	50
第6章 頭蓋ノコ	62
第7章 異物鉗子と動脈鉗子	70
第8章 銃弾鉗子と銃弾摘出器	82
第9章 瀉血と静脈切開の器械—ランセット、	